林若樹日記・大正三年（上）

牧野　和夫

ここに翻刻する日記は、林若樹（本名、若吉）が市販の手帳に記した「二月十八日～十二月二十二日」（付箋）の自筆にかかる日記一冊である。紀要本集に収載したものは大正三年の二月十八日から五月三十一日までの部分であるが、分載に特段の理由はなく単に分量などの関係に過ぎない。大正三年の残りの部分は（下）として掲載する予定である。筆まめで整理整頓好きな三村竹清の「不秋草堂日暦」に比べれば記述の分量は少ないが、興味深い記事も多く、ここに翻刻掲載する。近年、三村竹清の「不秋草堂日暦」や「南木芳太郎日記」など、林若樹に親しい趣味家の日記類が紹介されている。興味深いことである。

本翻刻は、十年ほど前に仲間内でぽつぽつ読み始めた家蔵する〔林若樹の日記〕の一部であるが、その後、継続できずに数年経過した。今回新たに翻字して掲載することにしたのも、右のごとき興味深い機運に誘われたこともある。こうした趣味家の看過しがたい顕著な事績が埋没することで生じる近代の「空白」（中世資料の近代における遁蔵状況などの〝空白〟）の大きさには測り知れないものがありそうである。思えば本日記を購入しえたことも、私が新宿区の中井に住むことになり、散歩がてら立ち寄った文学堂の店の奥に縄で縛った埃まみれの日記帖の嵩を目にしたことが縁であった。暫く時を隔てた頃に秦川堂で若樹宛の絵葉書帖を入手できたのも（現在の泰成堂主が対応）、全くの不可思議な偶然であった。いまとなってみれば、「必然」と考えなければならない事柄でもあり、本稿は「責務」の一端とも思うようにもなった。

手帳の簡単な書誌事項を記しておく。

表紙黒の皮（空押文）地に梨地布を貼る。（縦16.5×横10.0㎝）。見返しはマーブル文様。後見返しに「表神保町」の「文房堂」のラベルを貼る。2頁の中央に「林若樹記」と鉛筆書。3頁左肩に「大正三年」と鉛筆書。眉上高さ約2.7㎝で横界線を引き、下層は高さ14㎝、有罫12行半、1行の幅0.75㎝。4頁から24頁は記入がなく、25頁から日記の本文始まる。林若樹自筆万年筆書きである。

翻刻にあたっては次の要領にしたがった。

一、漢字は常用の字体を原則としたが、書名、人名などの固有名詞については原文どおりとした。

一、仮名遣いは原文のままとした。また、「ゟ」などは、ひらがなで「より」と直した。原文に見られる改行もそのままとした。原文の句読点をそのまま生かした（原文においては、本来句点と思われる箇所にも読点を用いているが、それもそのままとした）。

一、誤字、脱字、衍字も原文どおりに翻刻し、適宜その傍らに（ママ）を附した。ただし、（　）でくくらない「ママ」やこれ以外の傍書は原文どおりである。

字の抹消・墨滅とその訂正（自筆での）については、図（5）の如く二重傍線「═══」を以て示し、下字の判明するものは「𠀋」（右傍「六」）のようにする。

一、判読不能の文字は□とした。その他、□（ママ）は原文どおりである。

一、眉上などの書き込みについては、図（6）の如く〔46頁眉上書込〕として適当な箇所に「　」でくくって五字下げで示した。

一、小字双行は図（4）の如くそのまま翻刻した。

一、挿入を示すと思われる小字・傍書については、適当な箇所に［　］でくくって示した。

一、原本の毎頁の終わりに当たるところに　」をつけ、その下に頁数を入れた。【　」25】の如くである。

一、図（5）、図（7）の如く、挿絵・図・印などは、すべて図版として該当箇所に掲載した。

一、なお、本文中には、人権に関わる用語が認められる。資料的な性格を考えて原文のまま翻刻したが、人権問題の正しい理解の上に立って本文を活用されることをお願いしたい。

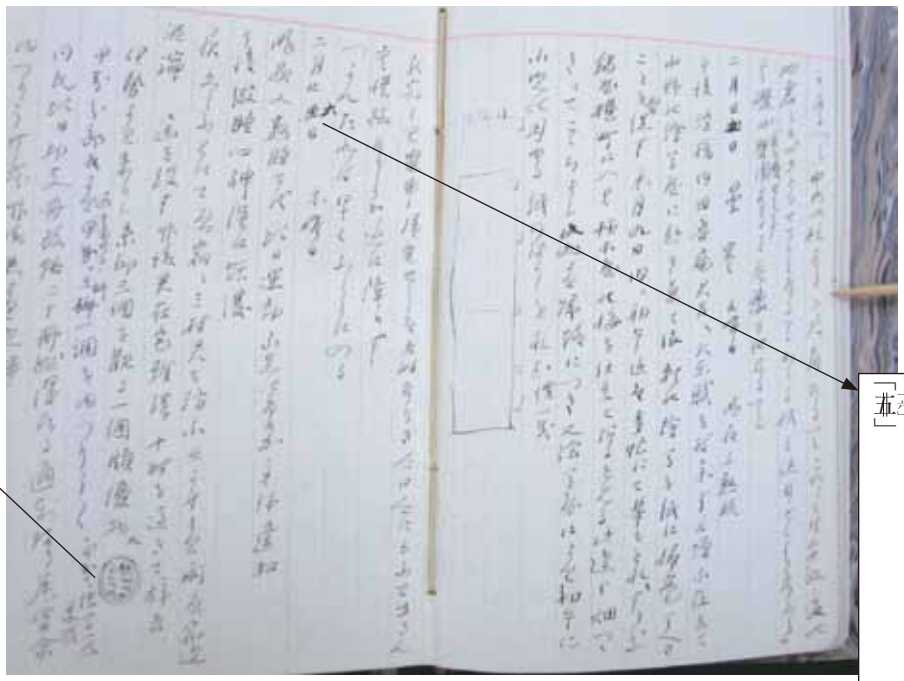
図（2）：2 頁中央
鉛筆にて「林若樹記」と

図（1）：表紙

図（3）：見返し

小字双行部分がある場合＝巻ナシ）此書近日サムマース氏より買入れしとて数十部積みかさねあり、

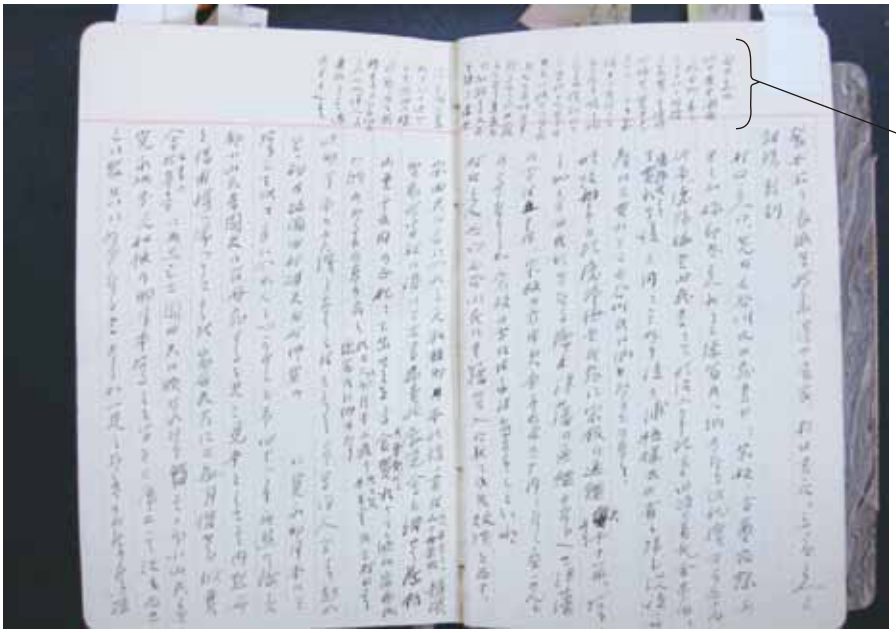
図（4）：25 頁　日記本文初行



本行に「五」と文字あり、上からペンで線で消し右傍に「六」と訂示する場合＝「五六」

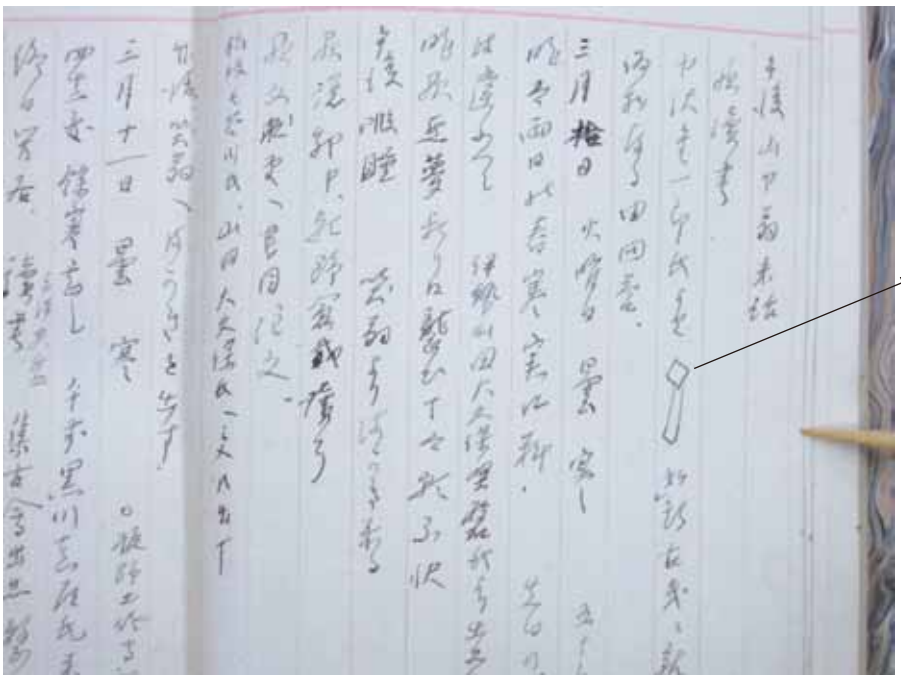
図絵などのある場合＝複写して該当箇所に貼りつける

図（5）：37 頁　36 頁



眉上などの書入・注記などは当該箇所の記述部分の後に五字下げで本文化する。

図（6）：47 頁　　46 頁



図絵などのある場合＝複写して該当箇所に貼りつける。

図（7）：50 頁

林若樹記」2
「2月18日～12月22日」（付箋）
大正三年」3
（白紙）」4～24
二月十八日　水曜日　晴後曇　暖
午前九時三村君来訪　十一時同行四谷通りより電車にて八丁堀竹
清君の店に赴き昼食にそはを取り三時又同行仲通り瑯玕洞並ニ
守尾をひやかす守尾ニ清国の一茎九花蘭あれと（一昨日着
荷）根皆枯渇して生気なければ買はず途中にて竹清君に
別れ、第一銀行にて同行配当金受領文行堂に至る主人不在、
長谷川泰氏の蔵書全部を買取りしといへは其為め忙しきなるへ
し又電車にて駿河台下下車神保町通りの書店をひやかす、松
村書店にて、千七百二十　年板の佛文の支那地理書〔James著〕大冊四冊
、千七百廿三年板佛文ケンプルの日本紀行を見る前者百二十円後
者五十円といふ James Summers Phoenix Vol Ⅱ、Ⅲ（初
巻ナシ）（此書近日サムマース氏より買入れしとて数十部積みかさねあり）、一円、倫敦日本協会雑誌第二編」25
巻六一冊七十五銭を買ひ八時前帰宅夕食、
留守中川喜田久太夫氏より使にて昨夜の出品物を届け来る、
今日長屋ノ塚本某転宅す、
子供両人トラホームにて医師に通ひ初む、
二月十九日　木曜日
朝より雪となる午後止む夜又雪
午後津の川喜田久太夫君来る次て山中笑翁見ゆ晩
餐終りて三村君来る、
夜、歓無極会第四回なり、会するもの前記三君、橋田
素堂、田子泰三郎、長谷川美廣の諸氏、長谷川氏は竹
清君の旧友にして彫金家なり、今回の博覧会に竹清君の
図案になる筆筒を出品するに就て批評を乞はんか為」26
め田子氏同伴来会せる也、角形の（四分一）杉と神鹿とを
配したる図也、
川喜田君の出品表太の（畸人傳中ノ人）菊の図一幅めつらし
十時半散会雪盛んにふれとつもらず
二月廿日　金曜日　□□曇さむし
終日閑居　昨夜の出品物をうつして夕に至る
夜、廿二日開催のかき札会（納札交換会）の札を画き卅枚を
調製すれは十時を過ぎたり
今年の冬は暖気なりし為め隣の梅なを盛りに軒の梅（去年植えたる）
花僅に数十をつけたるかこれも頃日開き初めたれど餘寒
厳しけれは香気少し
去春求めし支那春蘭花茎寸許になりたれと未芬香」27
を発せず
二月廿一日　曇　寒
今朝起き出るに眩曇（ママ）嘔吐の気味あり□臥床褥中食
を取るや、假睡夕に至りてやゝ愈ゆ睡眠不足の致すところ
なるへし
午後橋田氏へ宛納札を郵送す明日の会に出席如何を
案するを以てなり
沢鹿外氏より兼て借入の貼込帖の返還を促し来る小包
にて返送
二月廿二日　日曜日　雨、寒
今朝やや心地よし、
午後雨を冒して十軒店泰文社に行く、書き礼会の発会」28
なり、
四時近くに至りて漸く開会、札を配ること廿九枚、会するもの
納札連、大供会、集古会の一部より成る、趣向面白きものも
あれと中には納札のどこ迄も題名を主とすへき趣旨を知ら
ぬかと思はるゝもあり、又ハ一枚ことに画を代へたるものありこれ等
は画工に多しこれは手紙を人にやるに同一文句は面白からす

とて一々首をひねりて書くと同一にて貰ふ方にてはチツトも
其苦心は分らず真の骨折損といふもの且つ此会のことにては札は同一ならされは其趣旨に副はず、午後匆々開会
といひて四時に至れるは閉口なり次回は五時に開くことに決して散会山中翁と同行五時半帰宅　泰文社にて陳列の
画幅を見るに野口小蘋女史の幅のみ脱俗せり餘は俗」29
臭紛々として近よるへからす鷹田其石といへる人の画一幅
面白きものありたれと一幅は西洋の真似にていと臭し此人も亦
才筆なり、［京都、小山源治氏より小包到来、大楽賦、これは内田魯庵氏へ、筐／斎金石文考釈（小本 羅振玉校刊本）一冊恵贈同封書上海の同氏舎弟を紹介／し来る書籍を注文するに就て先日／問合ハせし其返事也］（牧野注：印刷上、小字双行にできず）
夜入浴、早く就床
二月廿三日　雪　寒　月曜日
朝窓を排けは雪なり、午後に至りて止む積もること寸許
昨晩夢内ならす気分悪るし午後假睡、
夕に至りやゝ快し
夜、北京勝山岳陽氏に書信、去年の北京行を想起して
［陳家の瓦当、磚等に就て問合はす］
遊志遊々
二月廿四日　火曜日　晴　寒
朝、文行堂よりはかきにて故長谷川泰氏蔵書凡五万巻」30
を買受け明廿五、六両日青柳にて売立をなすへけれは今夕青
柳にて下見をなすへし今回の挙明治以来の大ものにて古典界
未曾有といふへく目下大評判云々と言ひ来る、
今日気分わるし横臥、
夕食後雪後の泥濘を冒して青柳に行く同楼上に明日入札に認
すへきもの積重ねあり眼を惹きたるもの
五山版十八史略
同　左伝（欠本四冊）　廿六冊

慶長四年九月廿日校正　賢好
又　春秋経伝集解定上第二十七
以宝寿院殿（常宗）御自点本加朱墨了　吏部少卿清原朝臣重雄　十五才
」31
元和五年二月十二日御読書以此本
奉授了
写経大涅槃経　鶴岡八幡宮寺
永享五年（癸丑）三月廿三日（丁丑）
于時五奉行　前陸奥守憲直」32
活字版　孔子家話、論語、
同　太平御覧　百五十三冊
蔵経並続蔵経、
釈潮音草稿起信論義記（玄談並分科）　五冊
起信論義記筌蹄録跋
山僧潮音濫吹佛子有年于茲参天下諸龍象広
持薄伽梵大法蓋於賢首宗風深有因縁也天保
四年壬辰齢過知命故友皆逝親戚尽亡雖覚老
身矍鑠実是桑榆暮影不可久保也講録所書
起信筌蹄録一部兼玄譚分科合成十巻未脱艸
稿且留書函底遺嘱門人門人之中有才名者改削
謬解以立正義勿吝雌黄山僧其時在蓮茎界裏」33
愈添歓喜而已　天保四年冬十一月
白駒山海即定院　老衲潮音識
余前年得此書読此跋文有所感欲［校］刻而示
于世間然学浅力微不能遂其事深以為遺憾矣
三縁山主行誡上人亦潮音講師門人中之一人也余

就上人謀以此事上人有所嘉称当時縦大蔵校刻
之事荏苒経過年月去間行誡上人移住智恩院
而遷化焉余亦老矣校刻之事往来於胸中
而不休矣乎　明治三十五年二月廿二日　蕃根識
其他知不足斎叢書、津逮秘書等ありき　文行堂主人の池ノ端に
あるを聞きあとを追ふて琳瑯閣元錦袋円の土蔵に入る（此」34
店階下を書画屋に貸し琳瑯閣は数十間西の方に店を開けり今回
文行堂琳瑯閣に組合ひて長谷川氏蔵書を購ひ幸ひ此土蔵の
二階の空き居るを以てこれえ積みこみしなり）
三間半に五間の土蔵の階上一杯の本なり、俳書、易書、経書、
詩文、史書等硬中の硬なり、珍奇といふものは尠し電燈
二ヶ所点しあれと暗し提灯を提けたる琳瑯閣主人の案内にて片
はしより見てあるく身体の通る丈けの路をあけて高一間程に積
みたる本一杯なり五万巻といへはさもあるへし地理書等一括して
の代價を問合はせ置き十時過き文行堂主人と共に同堂迄引上
け明日入札の中慾しきもの数点の札の事を依頼し今月の図書
刊行会本を受取帰宅せしは十一時半なりき
錦袋円の土蔵は実に見事なるものにて梁なと凡二抱へ程」35
もあるへし中央の柱なと二尺角なるへしこれにては安政度の
地震にもビクともせさりしなるへしかゝる材を使用せしより考ふるも
其礎「小堅固なるか」（に金を費せし事）こと想像の他なるへし
二月廿「四」（五）日　曇　寒　水曜日　昨夜不熟眠
午後淀橋内田魯庵君方へ大楽賦を持参す、相憎不在去て
中野の絵馬屋に赴き兼て依頼の絵馬を紙に揮毫すへき
ことを督促す来月九日旧ノ初午迄は多忙にて筆をとれずといふ
鍋屋横町に入り植木屋の梅を仕立てあるを見る此辺より畑つゝ
きにてこゝちよし　此処より帰路につき又絵馬屋により初午に
小児の用ゆる紙のほりを求む價一銭」36

新宿より電車帰宅せしは五時なりき今日今にもふり出さん
空模様なりしか遂に降らず
つかれたれは早くふしとに入る
二月廿「五」（六）日　木曜日
昨夜又熟睡せず頃日運動不足の為めか身体違和
午後假睡心神僅に恢復
夜久しふりにて原宿に三村君を訪ふ出かけより雨原宿辺
泥寧　歯を没す竹清君在宅雅談　十時を過きて辞去、
伊勢より来りし糸印三個を観る一個頗優物　大
甲州分部氏より［送り来れる］甲州ノ三［舛］桝一個をゆつりうく、甲州ノ絵馬一枚／恵與
同氏頃日切支丹改帳二十冊程得たる通知あり悉皆余
ゆつりうけ度竹清君より交渉」37
印界俗談
美術協会にて一等金牌を取り損ひし咄
支那上海へ問合はせの金石類書目撰定、
旦斎刻黄鈿鋳印（狐のうでくみしたる紐）印文麥村ノ二字を見る
今日拓本類整理

二月廿七日　金曜日　晴　寒風
昨夜の雨今朝霽れたり午前十時拓本類を製本にやらん
とて大風呂敷二個を携へ雨後の泥寧を冒し電車にて駿河
台下下車神保町池上製本所に持参、瓦斯会社にて配当金
を受取り、藤屋にて日和下駄を調へ十一時半文行堂に至る
三村君在り一昨並に昨日の会の様子を聞く」38
八幡宮旧蔵涅槃経　二百八十円
木活本太平御覧　九十円［にて文行落とせしも村口の懇望／にて渡すと］
五山版十八史略　八十？円
左伝　欠本廿六冊　八十？円
津逮秘書　百四十円

〔39頁眉上書込〕
慶長活字
五経
百廿円にて
文行堂落札
同　孔子家語
三冊一冊欠
廿円
同上
凡て予想外の高價にてうれ行たりと予の注文の唐六典（官板）
は八円にて取らると
釈潮音原稿起信論義記　五冊
は十六円にて文行堂落札即ち予の手に帰す
楼上にて昼食二時辞去、竹清君と青柳に至り文行堂の荷の
中より起信論丈け抜き電車にて中橋下車、仲通り守尾
商店にて印材二個を求め一個は伊勢山田松木氏へ一個は」39
三村君へ篆刻を依頼す　積古斎鐘鼎疑議（石印本）五冊を
求め、豊嶋屋支店にて白酒（四合）一瓶を求め同処にて竹清君
に別れ電車にて四時帰宅
守尾にて竹清君、樋口銅牛の篆学叢書の注文のはかきを見付く
主人曰毎日電咄にてまだ荷は着かぬか／／との催促なりと
頃日朝日新聞に頻りに印談を登載中なれは、急に注文を発し
たるなるへし学者の内幕はコンナものなりと竹清君と相顧
みて笑ふ　　文行堂にて蘇峯氏の蔵書印譜の序成りしを見る
夜入浴　読書
九時ふしとに入り日記を認め今日収得の諸書播読　十二時近
くに至りてねむる
二月廿八日　土曜日　晴　寒」40
午前より晴風自作雛百種を床の間にかさる、並に書棚上に所蔵
の古雛十幾種をかさる夕に至りて終了、去年は雛百種は
かざらざりし為め［珍らしくて］榮子（満四才ト三月）切りによろこぶ
黒川真道氏より女用訓蒙所蔵の有無問合はせ来る、
三月一日　日曜日　静和　暖
昨夜亦不眠　今朝假睡、
午後三時　和田千吉君来話　夜十時に至りて辞去、
遼東　大玉（ママ）陵の瓦片一個　陵の字あるところ持参これにて
予の瓦は先つ一ト通り揃へり
三月二日　月曜日　曇　午後驟雨　寒
昨夜不熟眠　不快
午後山中笑翁来話　麹屋横町［古本屋］に百年程前ノ西洋古雑誌合綴」41
二冊を見ると、（京都の小山君に文通、封中、上海の舎弟君に紹介を頼み上海の本の値段を問合はす）
夕食後散歩かてら麹屋横町に行く雨降り出つ、本既にう
れてなし、原宿なる三村竹清君を訪はんとて道を大木戸より千駄
谷に取る大番町より水車のある所に行く闇中なから此道は「能く」
徳川家に年礼に行くとて幼き時より祖父洞海翁に伴はれて能
く通りし道なれば其頃のことなと思ひ出つ元とは畑のみなりしに
今数年ふりに通れは家居ヒシとたてつゝきて昔の面影は亡
はれつ、線路のふみ切りを越えて左折又右折すれは千駄谷の町に出つ
此辺商家多し、尚南へ小路を入りて遠を聞きつゝ行けはやかて
青山練兵場の酉はつれに出たりこゝよりは知りたる道なれは教を
乞はすして行きつきたり、時を費すこと約一時間、
種々雅談」42
甲州分部氏より送り来りし切支丹改め帳十八冊を竹清
君と共に分つ予は十冊を得たり年号は寛文より宝永
に至る、押捺せし印皆面目し中に寺の印に糸印を捺せし
ものあり、
明朝文行堂にて相会すへく約して十時過辞去電車にて十一

時前帰宅

三月三日　火曜日、晴

今朝榮子発熱八度五分、直に女医学校にやる、

午前十時文行堂に行く十一時に至りても竹清君来らす主人と

琳瑯閣の旧宅の土蔵（錦袋円店蔵）に入る、先夜見し時よりも書籍

三分ノ一を減ぜり地理書類、類書、叢書類を抜き出して

買取る庫中にありて文行堂主人、琳瑯閣主人と三人本箱を」43

食卓として昼餐を取りしも又一興自十一時至午後四時

一寸文行堂に立より五時半帰宅

榮子咽喉加答児の由大したることもなきに安心、

留守中亀田一恕来訪の由　夜入浴、

三月四日　水曜日　晴

昨日あたりより暖気春のけしきあり、

支那春蘭花咲き［一室］清香馥（イクたり）去年より花遅るゝこと約一週か

午前九時三村君来る。尋［赴（て）］亀田一恕氏来る、

十時、琳瑯閣より書籍をもち来る荷車に一台あり、冊数

約千六百、［冊］

竹清　亀田君午餐を食して間もなく辞去、

一千の書籍を調へて夕ニ至る、」44

榮子解熱、

三月五日　木曜日　晴　暖

漸く春めきたり

午後黒川真道氏来訪蔵書女用訓蒙三四巻二冊を貸す、

同氏曰某書肆の企にて人倫訓蒙等風俗上参考となるへき

書籍出板の催あり［先］其準備をなすなりと、

三月六日　金曜日　晴　暖

朝、鶯の声に目ざむ一昨年迄は此声を聞きしも昨年は遂に聞かさりしに

［今年又来りぬ］

南風吹きてなまあたたかく不快なり

午前十時過文行堂に行く今日大掃除匆々にして去り池上」45

製本所に表紙等持参途中昼食、村口書店に立より主人と

雑談数刻、

村口主人曰、先日長谷川氏の蔵書中に宋板の古尊宿録あ

りしが磯部屋主人取りて徳富氏へ納めたり此代價三百五十円、

此本は浅野梅堂旧蔵書にて明治二年比寺田望南氏金壱円に

て［浅野氏より］買取り後三円にうれり後三浦梧楼氏の有に帰し没後斎

藤にて買取りて長谷川氏に納めたるものなり、

明治初年の比浅野梅堂氏蔵に宋板の通鑑「‖（欠）」（あり）本十一冊？あり

しが寺田氏行きたる際は津藩の通鑑とならへて津藩

の方は五十円、宋板の方は欠本あれは三十円になし置かんと

の事なりしが宋板の方には手は出でさりしといふ、

村口主人、今回長谷川氏の書籍買入に就ての失敗談を為す、」46

〔46頁眉上書込〕

［村口主人曰

頃日、広重瀧図、

一枚本郷の市に

出てしに十円余に

て某買へり　淡路

町酒井一覧タメツ

スカシツ、ありしか

値もつけすして

去りたり　段々調

へたるに模刻にし

て昔のものならは

中央に紙のつぎ目

なくては叶はす

然るにこれは一枚
ものなり　某直ち
に切断して又之
を継ぎ浮世」46
絵専間の某
所にハメ込み
たり近時の模
刻愈々出て愈
珍なりといふべし
これか又洋人には
真物として通
用する也云々」47

安田君の手に入れし元和「椒」卯月本の謡の書は（欠本なり、五十冊余歟）横浜
貿易新聞社の催にて古書即売の展覧会を催せし際松
山堂十五円の正札にて出せしを　吉金「大奮発にて」買取りて遂に安田氏
に納めたるものなり云々（頃日又此卯月本二通り　共に欠本ながら　出て村口より　徳富氏に納めたり）
此卯月本の高價となりしはそも／／予等同人間より起れ
り、初め故岡田村雄君田村仲宣の　　に寛永卯月本のこと
ありしを以て手に入れんと心かけしを予四十二年西遊の際京
都小山天香園君の百冊蔵するを見て見本として其内数冊
を借用携へ帰へりて、其比安田君方にて毎月催せし欣賞
会（古書の持寄り会）に出品して岡田君に欣はれたり「═══」其節小山君より
寛永以前元和板の卯月本あることを聞きて席上其話を為せ
しに衆共に如何なる書なるか一見したきものなりなと語」47
り合ひしか後両三年にして安田若吉金より得て　大に予等
同人間にほこりしものなり
三番町にて剪髪　四時帰宅
［夕］統一発熱三八度六分　今日下婢ミキ、トラホームの治療を
受く、替る／／病人にて不快

七日　土曜日
昨午後より吹き出したる暖風夜に至りて暴風となりて、　々屋
を撼し終宵眠ること能はす　今朝頭脳忙ゝたり
午前風未だ止ます　［加ふるに］折々雨をもってす、午後より晴れたれと風
力衰へず　夕に至りて漸く静なり
夜に入りて又風、
不快の為め終日為すことなし」48
午前貞子両児を携へ　暴風をついて女医学校に行く統一
さしたることにはあらすと　午後に至りて熱も下れり、
八日　日曜日　晴　暖
霞みかかれる好天気なり今日和田君と相約して博物館
に拓本を取りに行く筈にて同氏よりの通知を待ち居りし
に終に音沙汰なし　空しく待ぼうけを喰ふ
買入れし漢籍を整理す、
夜入浴
比頃　鶯しきりに鳴く　梅やゝ盛りを過く
九日　月曜日　雨　寒
昨日の暖気に引かへての春寒なり、
正午入浴」49
午後　山中翁来話
夜　読書
中沢金一郎氏より　如し斯古銭に就て問合はせ来る、
偽物なる由回答、
三月拾日　火曜日　曇　寒　五十度
昨今両日の春寒　実に料　先日の暖気と比せは廿度
は違ふへし　伊勢山田大久保堅磬氏より出品物来る
昨夜　悪夢頻りに襲ひて今朝不快
午後仮睡　笑翁よりはかき来る
夜説郛中、朝野僉載読了

夜文求堂へ書目注文、
松坂長谷川氏、山田大久保氏へ受取出了」50
竹清、笑翁へはかきを出す、
三月十一日　曇　寒　○梶野土佐守記行を借ることを約す、
四十二度　余寒甚し　午前黒川真道氏来話女用訓蒙返還。
終日閑居、議書「東洋史要」集古会出品整理、
文求堂書目来る
三月十二日　雨　寒
才も亦寒し　不快　臥褥
東洋史要を読む

三月十三日　陰霽不定
今日は漸く暖し　鶯頻りに鳴き、蘭花盛芳香満室
正午前伊地知かん子来訪共に昼餐を取り二時辞去」51
毎日鬱陶敷天気にて気分晴れす　二三日来咳嗽あり、
北京勝山岳陽氏より返書（山東ノ碑の事）あり　出馬を促し来る来月下
旬出京諸々の相談とあり、
明日集古会なれど両三日来の不快にて出品物も調はす漸く
夜に至りて其準備を為す、
三月十四日　土曜日　雨　寒冷
昨夜咳嗽ありて熟眠せず　加ふるに暁三時より櫓太鼓の音に目
ざめて眠をなしかたし八時過強て起き出つれは雨なり、
今日は集古会なれは止むを得す雨を衝いて十一時半会場
青柳亭に赴く　三村、山中、福田三氏既に在り直ちに会場整
理、課題は
　流行のもの、徽章類、魚介に関するもの、」52
集古会は故清水晴風君の発案にて第二土曜は雨天の事
なしとの経験により会日を第二土曜と定めてより不思議に降
るといふことなかりしか今日は珍らしき降雨にて為めに参会者は
例に似す尠く凡三十名程なりしなるへし
和田千吉君談　昨夏九州旅行の際委（ママ）奴国王の金印を発掘せし
　に赴きて其個処を検せしか海に濱せし地にて一路ありて其傍
は直に海　其道路の上は段畠になり居る其段畠なり由一の根本
資料とするものは甚た根拠薄弱なる村の記録のみ、金印は
石の下より出たりと伝ふ其石なりといふもの今は其傍の田のへりに
つかひあり、又　或人は此場処にあらす真実の発掘地は今は既に海
中に入れりなといへり　其遺跡地には「古来」標示もなくして「‖」口碑に伝
へたるのみ、此処を発掘せしか何も出てす二三祝部の破片出たる」53
のみ天下に知れわたりたる事実なるか、今迄あまり実地調査を為
したる人も聞かす近年に至りては予初めての次第なり　今回爰に
石碑を建て永く紀念とする計画あり云々
又曰府中六所明神に古鏡二百有余あり　内　三十何枚優物なり　近時
同所宮司と懇親となりたれは、一日　拓しに出かんといふ　予等賛し
て来月初旬を期して決行すること、す
五時散会、寒雨蕭々和田君と飯田橋に別れ山中翁と河田町
に別れ六時帰宅
入浴　直に臥褥、
三月十五日　目曜日　曇、寒
瓦師二人来　「長屋の」屋根を直す夕終る、
終日臥床（甘露寺氏より三貨図録写本、百五十八枚五冊出来アト三冊ニて出来上りとの事）」54
幸田成友君より拓本用墨肉ノ件問合来る直ニ返書
内田魯庵君ニ近況を報す
三月十六日　月曜日　晴　寒
久しふりの晴天なり、咳嗽追々よし、
午［後］前昨夜のはかきと引違ひに魯庵君より封書並に先
日撮影の写真（家蔵支那古物）八葉送附し来る、
午後魯庵君来話夕辞去
同君談　佛国の東洋学者シャバンヌ氏は　在来著書もありて

有名なるかペリオ氏が燉煌発掘をやりてより其声名遥に
シャ氏を凌駕せしを以て其弟子快しとせず今は両派事毎に
相争ふの観ありと聞く云々
[――――――(ラウファー氏)]人氏著の玉のことを書きし本(十五円程)は今は絶板」55
となれり代価益々騰貴すべし
佛文の支那吐魯蕃中のChaw Chaw(書名)と称する地の発掘物
の図録あり頗る大冊なり(価九十円)佛像類多けれと頗る
美麗なるものなり日本にても十数部うれたり新海竹太
郎氏も購買者の一人なり同氏はかゝる図録ものを集め居
るがどの本箱にも這入らぬ程の大冊にて困り居るといふ、又日本
画家某氏(美術学校出)も大奮発(月賦にて)(ママ)にて買取りたりそれは
美術学校にて買へりといへるを聞き学校に問合はせしに結城素
明君持ち行きしと聞き必定文展迄には学校にハ返へさすと察し
大奮発にて買取りしか其書物を観んとて其同人毎日つめかけ
るため其妻君は毎日客膳を出す為め愚痴をこぼせりと聞く
云々」56
三月十七日　火曜日　霽　やゝ暖
午前亀田一恕氏朝鮮出土物を携へ来る　銅印、古錢、木
櫛、簪等あり、頃日　朝鮮より来りし商人の売物にて至急
金にしたしとの事にて奔走すと　銅印十一個を求め　代價
を支払ふ午餐を共にして後同氏辞去、銅印の緑鏽を落
さんとて小刀の先きにて削りしに驚くべし　内六個程　[印文]元印を模
したりと見ゆるものは内部石膏細工にて上に銅の鍍金を
かけそれを鏽びさせたるなり、依而一ト先同氏へ返還せんとて
直ちに徒町の同氏を訪ふ未還へらすといふ依て夕方迄文行
堂に咄込み六時過再訪幸に在宿依而銅印全部[引]取の談判
を依頼し七時半帰宅　入浴　就寝　未　咳嗽あり、
気分快からず　夕、留守中山中翁来訪之由」57
三月十[七](重書「八」)日　水曜日　雨　午後に至りて霽　暖
隣家の杏花(アンズ)三分の盛也　鶯鳴く、
午前　唐本のツクロイ、
午後、三田村玄龍氏来　次て山中笑翁来話　三人火鉢を擁して
夕方迄談笑
三田村氏　予が先日入手せし釈潮音の起信論義記を見て曰く
此書は予の師、島田蕃根氏長谷川泰氏へゆづらんとて此書
を持ち行かれしを知れり　其時　値五十金なりき
潮音師のことは島田師よりいろ／＼聞き居れり駒込辺の桶屋
の子なり、此桶屋行倒れの六部を引取りて世話せしか息
を引取る際　其恩を謝し再生せは此家の子となりて恩を
報せんといへりとか　其後此子生れしを以て六部の再生な」58
りなといへり、
西教寺の徒弟となりしか幼少より見所ある僧なりき　西教寺は
真宗なれば肉食妻帯なり　住職に一人の娘ありて潮音師
を婿にせん下相談ありしに師曰く「予は世間の僧のごとく肉食
のみはすべしされど」[肉食]妻帯はあまり佛に対して勿体なし二者
一を選はゝ予は肉食を「撰」取るへしと堅く誓ひたれは志は難
有けれと此寺を継きて妻帯することは平に謝する旨にて頑と
して応ぜず結局それなれは妻帯せすともよろしとの条件にて
後住となれり然るに此娘は一旦其縁談ありたる上はとて
嫁にも行かすして此寺に留り、師「(ハ)」寝処を異にし一生師に仕
へしといふ
師は寝坊にて此娘に起されたりといへり」59
　予曰此咄人情に遠くして信ずることを得ず
宗旨は異なれど行誡師のことさも其起信論の聴講者の
一人なりき或時、行誡師に肴を喰いせし咄あり、
山中翁曰、松平菖翁（左金吾）といへる旗本の花菖蒲を改
良して名高かりし人は先きに聞きしには浅香沼の花かつみ
を取りて改良せしなりとの説なりしか、頃日富田豊春翁の

話によれば富田翁の兄人の咄なるか此菖翁「ゆ」より其根を得
んとするものは先此翁に誓詞を入れて門人となる然るときは
［決して池等に植ゆるを許さす瓶のみなり］
五株を頒ち呉るゝ花咲く頃此菖翁を招じて見評を乞ひ
五株共出来栄よければ又来年は五株を頒ち呉るゝなり　三株
のみ及第すればアト二株は焼きすて三株のみ配布さるゝなり
故に各種を得んとするには年も又金も要するなり、要する」60
に株の猥りに流布するを恐れし也、
十三代将軍のとき青空と称する菖蒲天位となりたること
評判となり将軍より差出すへき旨命ありしに其株は上げず
其年は悉皆花のみ切りて差上けしといふ、
此菖蒲を改良せし最初は旗本に限り一生の中一度は願
を出せは伊勢参宮を許さるゝ規定なり此翁も一年参宮
し伊勢路にて其種を得たるに始まるといへり、
此事を三村竹清君に談りしに、神都名勝誌に斎院花園と
いへるところありて此地に花［菖］蒲あり土地にてはドンド花といひ
て其図を出せり多分此処より得たるならんとの事なり
堀切の菖蒲を開きしものは同しく此菖翁の処に出入せし
ものなるか其事を聞き出し伊勢に至りて其種を得これ」61
を培養して別に園を開きしものといへり云々
夜七時小嶋精太郎君来泊
拓本製本四十四部出来
三月十九日　木曜日　晴　西風ノ強風終日吹く　寒し
今暁四時にめざめ又ねられず七時起床心地あし
午後玉海ノツクロヒ、今夜　歓無懐會諸氏に差支多ければ廿五日にのばす
午後三時亀田一恕氏来る先日の銅印は全部先方へ返へした
りとて一半ノ現金を持ち来る　アトハ来月迄貸す四時過去る、
両盆の支那春蘭皆開花一盆ハ五茎、一盆は七茎の花つく、
一昨春遠州より取り来りし春蘭蕾未堅し
三月廿日　晴　朝寒　午後より暖　年前六時博覧会開会の煙花に日さむ
年前九時過三村君来話暫時にして同氏宅より使にて博覧会」62
出品人として参会すへき様云ひ来り衣服持参直ちに正装し
て上野に向はんとして辞去さる、
午後菊の根分け黄白赤各七鉢あとは花壇に移植、夕に至
りて終る、直ちに入浴
つかれたり夜何もなさす　就寝前東洋史要を読む」63
（63頁6行目から70頁13行目迄空白）
四月一日　晴
午前十時約を履んで千駄木林町に素明君を訪ひ魯庵
君来らさるを以て同行　真嶋町渡邊氏別邸内なる陶窯を
観る煉瓦造一間に一間余の窯なり建坪は約廿坪もあるへし
諸事西洋流なり、一昨日開きたる第三回目は皆失敗に終れり
とて製品を示さる、硬質陶器に似てなつかしからさるもの也
内にサヤの内に煙「ゆ」入りたる為めや、暗色を呈せるもの却て
面白けれは小茶碗と共に乞ひ受け去て美術学校内の
陶窯一見　正午別れて予は博覧会を観る直に工業館
の琉球部に至れるに早々皆売約ズミとなり居れり其背
中合せの土州ノ紙の部に至れはこれも一足違ひにて商人体の男
［博多の当り餅を試み］
に買はれたり寿司を昼食に代へ第二会場台湾館即
賣店にて紅頭髪の木彫人形二個を購ひ江戸川行の電車に」71
て帰途に就き四時半帰宅
（2行空白）
四月二日
（5行空白）
四月三日　金曜日
（3行空白）」72
（3行空白）

四月四日　土曜日　雪
朝より雪となり昼頃より盛んにふり来る、
十一時　三村君山中翁と同伴来り訪はれ直ちに辞去
一時　雪を冒して吉祥寺に赴き赤松叔母上の三周忌法事に會す寺内の桜花今正に爛熟　雪中の花亦一奇観、
四時帰宅
夜に入りて雪未止まず　寒気骨に徹す
四月五日　目曜日　曇後霽夕驟雨　午前亀田氏来訪
［朝屋上庭園皆白し午後雪解く］
庭の樹木手入　今日も寒く風身に泌みて二月に返へりたることし」73
四時　柳田國男君来話
山吹日記　寛政頃河越より上毛等の考古的漫遊日記
河童の話、
九州にては河童のつきたるを落とす家三あり一は肥前諫早の
ヒョウスベの神主渋江氏、久留米の水天宮（アマゴゼといふ）並に肥後
阿蘇の成延坊
杜「弗」板帰　打身の薬　淡薬也
和名カッパ草、カッパのシリヌグイ、又、イシミカワ
甲寅叢書出板に付予にも何か書けとの事、三千円丈け寄附するもの ありこれの尽くる迄発刊
郷土研究は高木敏雄君今回業務多忙にて辞したるに付今更
ら廃刊するも惜しけれは　予（柳田君）引受けて編輯するつ
もりこれにも何か見聞のこと何にても書くへしとの事
夕方驟雨一過夜月朗也」74
夕食を共にす夜山中翁来話三人鼎座「＝」して雑談九時柳田君
辞去、十時笑翁去る、
四月六日　陰霽不定　冷　月曜日
午前庭の手入れ
午後　伊地知かん子　たか子を伴ひ来る　帰へりを両児を伴ひて
合羽坂下迄送る　植木鉢一個求めかへる
十日佐藤家祖先祭　上野精養軒招待
四月七日　火曜日　又雨寒冷
終日不快　臥床
夜　収得書目を記す、
祖先祭欽席通知
四月八日　水曜日　陰霽不定　時々驟雨雷鳴雨ふる」75
午前庭の手入れ
午後本箱の修理
午後沢塵外氏来話東都と題する月刊雑誌発刊之由
夕食後入浴　集古会誌編纂に取かゝる、
［今月］中央公論、吉井勇氏の俳諧亭句楽の死（落語家 富楽）心を惹
くふし多し「僊」只折々彼等の詞の真の彼等の詞にならぬ
が興趣を殺ぐ
四月九日　晴　西ノ強風寒し　木曜日
午後会誌編纂　拾二日徳川公爵邸園遊会延期
号外あり先月下旬より御病気中なりし皇太后陛下今暁一時
五十分再度の狭心症を発せられ御危篤に陥られ今朝七時
十五分ノ特別宮廷列車にて天皇皇后両陛下沼津へ行幸」76
あらせらると思ふに既に崩御遊されしなるへし今春以来天
災屢々至り且つ政略又未曾有之紛擾を告けて内閣未其
組織ならず今又陛下崩御の報に接す嗚呼、大正之御世
は何となく影のうすき心地せらる「此」かゝる心もちは冥々
の中誰人の心裡にもきざすなるべし
夜、笑翁来話　月よ□し　川喜田君より来書近々上京ノ由

中村正直氏の西国立志編の刻は岩下三次といへる人によりて成れり、
柏原集而氏には明治初年格致叢求といへる絵入ノ三冊本の著あり（再板ハ
画なし）文中アレキサンダー氏の蒸気の一項あり山中翁アレキサンダーは地
名にて人名にあらずと論し遂に其説勝ちたり　これより柏原氏と懇意と
なれり
笑翁は明治三年より十七年迄静岡に居れり
松浦竹四郎翁と知己になりしは　柏原氏より早しと思ふ

四月十日　晴　午後よりやゝ春暖　金曜日
昨九日午前一時　西沢仙湖氏病没の報あり」77

午前

午後気分わるし　夕入浴

夜　会誌編纂

竹清君より封書　蔵書印取調の事、

東京朝日新聞　本日より新活字を用「ゆ」ひ　段となる、

四月十一日　土曜日　晴　暖

午前十時　黒川真道氏来話、風俗画本出板のことに就て予の蔵本参照の為めなり

先代真頼博士は遠去元夜は行燈を用ゐ　三本燈心の下にて読書抄書を為せり　慣れたれは苦にならず　且「‖」つこれこそ真に燈火に親むわけなりとて洋燈は用ゐられさりき　佐田介石氏ランプ亡国論を唱へ後自ら種油を用ゐたる親光燈といへるものを発明されたり　されど燈油は吸上くる力弱く油の一杯ある内は明なれと直ちに力弱へて遂に行はれすなりたり」78

今住居する小鳥町廿八番地は維新後買求めたる邸宅なり　二間に二間半の土蔵ありし先代の時これに又二間程つけたしたり、明治初年にはアノ辺御家人の邸にして閑静なる地なりしか今は熟闘の街となりて火災其他蔵書に取りては其危険の地となりたり　移転当時には町内には頭いふものもなく遠く鳥越より書を入れたり其後に至りて町内に鳶頭出来たり故に今も予の家のみは町内の頭の支配を受けず鳥越より来る先方も三代程代替りをなせしも依然として出入なり、

〔79頁眉上書込〕

「三田葆光氏は各所
の桜等には委しかり
き其咄に向嶋の桜は
元は吉野桜か其薄
色なりしに今は丸で
他種のみになり残れ
るものは此木と此木の
みなりなど指し示
されたることあり又上
野はベニ彼岸
が薄色なりし云々」

［今博物館にて其種を植へ継き居れど昔のベニ彼岸とはやゝ異なる嫌あり、］

昼餐を共にし　一時過辞去さる

二時家を出て西沢氏の葬儀に會す　葬所は谷中初音町の観智院なり、白山上にて下車徒歩団子坂に出て三時同処に至る会葬者二百余名本堂狭ければ控室にあり施主のアイサツの後本堂に至りて焼香直ちに退散、魯庵、寒月其他知人にあふ笑翁、竹清君と同行　文行堂に向ふ　真嶋町辺より花園町に出つ途中、「‖」（永野）年方」79の旧居を過く、竹清君其二階を指し予十八歳の時家の迫害にあひ画工にならん志を起して年方氏の門に入りあること一週日、新聞の挿絵を写すのと、サヤ形をひかせらるゝのみにアイソをつかして硯を懐にし机は置き去りにして逃け出し其後荒木寛畝先生につきたるなり（これもをんでゝ了へり）　彼処に見ゆる大樹の二本ならひ立てるをアノ二階の椽よりよく写生したるものなり其比は此辺、桃畠、むぎ畑等なりしに候今は家居立てつらねて昔の面影だになし云々

本日は博覧会　皇太后陛下崩御発表に付一日丈休場、（諸興行物並に賣店等又同様）しかしさすかに人出はあり

文行堂市にて不在、筋違外迄徒歩同処に竹清君に別れ笑翁と同車五時帰宅」80

四月十二日　日曜日　晴　暖なれと風ひやゝかなり

在宿、お貞頃日不快　今日順天堂分院に行く

会誌篇纂略めはなつく、

夜稗海［四］所「‖」収、捜神記読了、

四月十三日　月曜日　曇　暖、夜に至りて雨、冷

在宅、

夜山中笑翁来話　今年分課題取定め、

笑翁話、維新当時江戸城引渡の際は大奥などは三日立ては直ちに又元のことく受渡さるゝものとの噂ありたり、西ノ丸の御多門なとには大奥の長持等をもち込み其入口には何百となき真鍮の燭台をつみかさね奥には何を入れ置きたるか分らぬ様になし置きて立退きたり　然るに其後日に

至りてこれを見るに大方長持の中なとは皆空になり居たりといふ」81
大奥の御居間の床の間なと琴、碁盤、銀造の万年青［実は］珊瑚樹、等の
造物等其まゝにして御立退たりしか如何なりけん、
かゝる最中にて内輪にてもケチナ泥棒は沢山ありしなり、御広敷番の
宿直する部屋には夜具戸棚あり其上には上下箱を入れる棚あり其棚
板は厚きヒノキ板にて二三段になしありきそれを皆取り去りたるも
のなり、これ等は御広敷番か皆人足をつかひて自宅に持ち去りたる
なり、人足も能々働くなり、［屋根のヒアハヒノ厚き銅板なとも持ち去れり］其以前に
ても「‖」御炎上にて天璋院様の田
安家に一時御立退あり其後清水家に入らせられし際
（1行空白）
惣髪といふもの流行れり月代を極く狭く中央に指の一本乃至二本程入れる
丈けを申訳に剃りたるものなり、予のことき頭が冷へるといふ理由にて
願を出して惣髪をゆるされたるなりかかる髪ならされは当時は
幅か利かさりしなり然し天璋院様はかゝる風は好ませざりしといふ、
刀も肥後作り行はれたりフチ頭も太く、コヂリも長くはまれり、ツバも
［小にして］上にそりたるものなり、それをさすは落しざしにさすなり　此装具中
之價貴く、フチ頭、コヂリ等にて十両程、ツバは三両程取られたり、
其以前武術者なと組打の際の用意なりとて右手にもう一本」82
さし都合三本帯刀せしものもありたり
予は明治二年の暮れに和宮様の御供にて京都に上り、三年の桜咲く
頃迄滞在して「汕市」［東京］に帰へり其際は太政官附の名目なり然し扶持は
依然として徳川家より頂きたり帰後慶喜公の奥方の小石川の水戸
家に謹慎し居給ふにつき参らせ明治四年頃静岡に送り参らせ同
処に至りしに直ちに御手当出て御暇となりたり其時御供のもの五十余
人もありしなるへし　旅宿も取らぬ内に御暇となりたるなり一旦「汕市」
東京に帰へりたり　其際英学修業ならは何程かの扶持も出て東京
在住を許されたるも然らされは静岡在住者ならされは扶持は出
さりき此際朝臣になることも種々強ヨウさるゝ傾もありたり予の如
きも種々運動せしも失敗に終りて［結局］静岡に移住することになりて同
処に赴きしは五年なりしならん断髪令廃刀令の「あはゆ」出る迄結髪
帯刀せり、然し「［以上のごとき］ホ〜ホ」状体故維新当時直ちに静岡に移りし「際［人々］」の
ことき苦楚［ママ］は嘗めず、二年の暮れに京都に赴きし際興津辺な
るへし非番にて同僚二三人と同処を通過せしに慥に旗本か能き身分の
娘と覚しきもの茶店を出して給仕せしを異様に感して今も能く
覚え居れりこれ等は最困難を嘗めし人々の一人ならん」83

四月十四日　火曜日
昨夜より今暁にかけ豪雨　朝に至りて止み西風強し、
夜に至りて風漸く止む
会誌編纂　夜に至りて略成る、
夕　入浴　小児二人を入る
就寝の「‖」前読書　昨今両夜にて述異記読了
四月十五日　水曜日　晴　暖なれと風冷
午前会誌編纂結了
午前、小川一真製版部の小林某　和田千吉君の紹介にて来る古今
対照の写真帖をつくる材料を借らん為め也医術類のもの要用
との事［なれと皆無なれば］断る
午後　三番町にて剪髪　公木社に赴き会誌原稿を渡す今日公木」84
社休みなり留守番に手渡し　樫木書店にて Sriad Burd of Ruins on Khotan by Stein
を求め書店ひやかし小川町にて時計のガラス入れ替へ六時半帰
宅　つかれたり
十九日歓無極会通知を認む
読書
四月十六日　晴　午後驟雨雷鳴夜に至りて止む
例会通知投函　魯庵、成友、竹清、共古、田子、米斎、和田、翠渓、松廼舎、
素山、柳田國男
午後散歩に出かけんとせしに雨ふり来りしをもてやむ、
歓無極会記録整理、

夜九時より雛百種かたづけ十一時に至りて略結了
十二時就寝、今日大隈内閣成立発表、
正午、日本火災に保険金払込む（割引「にて」七円五十銭 家屋三軒三千円 土蔵千円物品二千五百円 〆六千五百円）85
四月十七日　金曜日　晴　冷
朝より雛百種を戸棚に納む（並に）座敷掃除　夕に至りて終了

四月十八日　土曜日　晴　暖
午前　竹清君来話　先日預け置きし拓本類表題揮毫半分持
参さる、十一時去る、
午後小供両人をつれ東大久保に山中笑翁を訪ふ　馬淵氏にとつぎし翁の次女
産後死亡せし吊辞を述べんとてなり全
家留守　直ちに帰途に就き久右ヱ門坂上より電車　原「（西）衢」
下車四時帰宅
栄子帰宅後発熱　卅八度　今朝女医学校に診療にやりし
に、大したることなしとの事故散歩に伴ひしなり一週間程前より」86
食態不振の状あり明朝順天堂にやるへし、
川喜田久太夫君より来状去年の今頃は支那にあって亡国的
の歌唱や珍奇なるものに眼をさらし居りしか去年を回顧し
て興趣尽きす貴兄（予）も同様の観あるへしなと云ひ来る、
同時釘屋箪笥一個恵贈の旨
夕刻　箪笥届く、
夕食後入浴　夜幸田君の［二代］竹田出雲肖像の賛を模写す、
四月十九日　日曜日　晴

夜歓無極会第六回、来会者柳田国男、加賀豊三郎、
三村竹清、橋田素山、田子泰三郎、長谷川美広、幸田成友、
等、山中笑翁遅れて一寸顔を出す」87
柳田君　代前の祖翁の日記（享和より文化二）冊持来、
田子氏津川（会津）より出たる、煙管数本、山形のかんざし（松葉かんざし）、
橋田氏、津島祭の玩具、
予は、紅頭嶼の人形、木の葉猿、壬生面型、紀州新宮ノ生柴（ナマシバ）［煙草を巻］く椿の葉
等　山翁出品ナシ　竹清君も出品振るはず　幸田君小銅佛数個
夜十一時散会
四月廿日　月曜日
終日昨日の出品物模写

四月廿一日　火曜日
集古会誌三冊分ノ校正昼前より夜十一時に至りて初校々了
二月下旬上海ノ佐々木　氏（京都小山源治君弟）へ注文ノ書目類二十種程来る」88

四月廿二日　水曜日　晴　南風　塵多し
午後　統一を伴ひ　三菱銀行より日比谷公園に遊ひ帰途電車
満員つゝきにつき数寄屋橋外より外濠線にて帰宅時に四
時半、統一をやや遠く迄つれ行きしは今日初めてなり、大に嬉ぶ、
午前三村君拓本（五経部）先日ののこり分持来たる、
四月廿三日　木曜日　晴
本箱の入れ替へ下の座敷の床ノ間をつぶして本の置場とす
朝より夕に至りて止む　午後川喜田君より書状
夜　但く春の歌数首よむ、（大野英男氏津井先生の［紀念］文庫資金寄付之件にて来訪）」89
（3行空白）
四月廿四日　金曜日　晴　南風
本箱の入れ替へ、午前山笑翁来話
夕入浴、つかれたり　夕食後竹清君を訪はんとせしか仮睡して
果さず
四月廿五日　土曜日　雨　暖
今暁二時過大雨に目さめてねむれす四時よりわつかにまと
ろむ　十時起床　頭重し　午後仮睡、

一日何もなさず　夜公木社へ集古会開会通知はかき原
稿郵送　和田千吉君へ廿七日府中行問合わせ
四月廿六日　日曜日　晴」90
午後五月人形をかさる「棊」
　晴風翁作、小、かさりよろひ、応神帝よろひ片袖、
　鹿児島五月武者［人］形
　越谷（古製）菖蒲太刀二、
　かなめや製座敷かさり五月人形、
床には宝暦頃の紙のぼり　和藤内虎狩図（須板筆彩色）
小児等よろこぶ
夕　和田君来訪明朝六時五十分新宿発にて府中行決定之旨
夕食後明日之支度をなして後、東大久保に山中笑翁を訪ひ同
行を促す不在直ちに帰宅
四月廿七日　月曜日　晴後曇、
四時半起床六時家を出つ塩町にて電車を待つこと二十分許」91
新宿追分に下車すれは和田君あり同行ステーションに至る笑翁、
竹清君既にあり六時五十分発車、七時半国分寺下車徒歩
府中に向ふ府中迄之一本道、往来ひろく道坦々としていつきても
こゝちよし、花既に萎して新緑愈緑なり国分寺旧趾の棒
杭新に路傍に建てり麦既に穂をぬき桑芽を出せり農夫三々
圃をかへすを見るこれより彼等繁忙の期に入るなるへし道路
に沿ふて柵をめくらし、一廓をなし樹木なと植え込みたるあり
既に此辺もそろ／／「㕝」別荘地に買入せしものあるを見る
水力電気の電柱いつ見てもめさわりなり彼の六社入口なる
槻の並木道緑のトンネルをなして見わたさる景又落葉の
時期には別個の趣致ありて神往くの概あり、竹清君話
村田保なとゝいふ人は貴族院にて弾　演説を為して正義らしき」92
人物なるか頃日某所に於て同翁の書せし「〓」日本魂と書きし
三字額を見る其落款に大勲位功一級熾仁親王賜号水産翁
の印あり親王の肩書を書すには及ぶましこれを見ても彼れの偽
愛国「偽愛」忠臣の人物なること想像にかたからず昔者（人あり）、呉春に
画を嘱し長銘をしるさんことを乞ふて諾かず依て　（清）「〓」長門守
何ノ何某［刀カヂ也］東隣呉春と書きて與へしといふ話と相対して彼れの人物
の高下を見るへし云々　予曰古来名高きものは大凡（ママ）谷（街か）気あるもの「也」
高名なる陰には必ず臭気あるもの　人物を察するに思をこゝ
に致さゞるへからず
街道を横ぎりて六社に詣づ　ブラ／／来りし為め一時間と十分を費せり
社務所に至り「〓（宮）」司猿渡氏に面会兼て和田君より通し置きた
れは直ちに座に招して此社に蔵せし神輿につくる古鏡三十面
程を出し示す足利より徳川氏初期のもの多し直ちに椽側に出」93
て拓模にかゝり午後一時に至りて終る、
今此社に蔵しあるは優等のものを引き抜きたるにて他にも二百面
程ありこれ等は氏子中神輿掛の家にて保なし神輿をかさる前
には其家より持ち来りて神前にて鏡をとぐ式あり（塩にてみがくなれど只儀式のみにて清めを為す也）　其後神輿にかくる也、
寛文年間久世大和守　の納めし硝子鏡等ある由武蔵風土記
稿に見えたれは乞ふて見る同時寄附にかゝるもの七点あり
　和蘭美以豆呂鏡（方一尺許の硝子鏡、赤地の「唐草」にて装飾を施しあり、金唐草）
　カシワ　ドリ卵子香合（駝鳥ノ卵を二ツに切りて香合となしたるもの内部は文尽し画絵美事なるもの也）
　敎眼鏡（これは和蘭ゆわたり也、長五寸程のクケツにも見ゆる眼鏡也、外面はこヒ色の薄皮にて包み金地の模様あり）
　壱竹
　龍鳳硯　並　同墨（硯は唐硯なるへし経七八寸自然石を利用したる硯、墨は和墨、円形）
　海中の鳥甲　蛸船也　」94
又、此社にて使用する発火器を見る以上と共に別に図を取り置けり
此東敎丁なる［字］経　といへるところより出たる板碑　枚を見す、
（3行完白）
主典福嶋氏より種々のことを聞く（宮司猿渡氏は常陸人にして近年猿渡家を継ぐ、国学院卒業生、）
此社「此」は年中の祭事八十何度あり、［其折は］社家等より人来りて事を

行ふを以て内輪のみにて催すこと出来にくゝ社衰微の今日甚迷惑なることもあり、

社家四人をチヨウグワンといふ祭事の節神輿御旅所に至る際、此四人の内より其年の國造代となり馬上にて厳粛なる儀様をとゝのへて御旅所に至りて幣を奉る式あり此四家楽を伝へて伶人となる、巫子二人あり巫子舞を舞ふ此家女を以て相續す」95

五月大祭の事ハ諸書に詳なり

御田植の行事といふものは今廃せり、

七月廿日（旧トは六月廿日）には門前に李子の市立つ古来より盛んなるものにてこれを李子祭と唱ふ此日社より烏扇を出す門前にても烏団扇を賣るこれは虫を掃ひ疾病を除く呪なりとて近郷近在より受けに来るもの多く四五万の扇を出す　近年桃羊カンを名物とするは此李子祭に因みて新製せしもの也

扇は極く粗製にして烏二羽を画く古来此社には羽ガイの下の白き烏二羽ありといふ、維新前には神前の御供米は飯米にして差上げたるものなり　其後使用せりとて鋼製の大きなる高杯の如きものあり「II」一個に飯三舛を入るゝ今火鉢代用として今日も座に出せり

其神前のお下りの一部は必ず烏に供せしものなり　烏に供せし鯖もありたり、社の西方に出し置くといふ、今は皆洗米を用ゆれば此事も亦廃せり

李子祭並烏扇の事諸書にみえす創事也、

（1行空白）」96

先々代猿渡盛章著　暗燈雑筆　五巻、

先代　容盛著　反古帖　凡八十巻、

〃　〃　武蔵總社誌　三巻

〃　〃　同　或問　一巻、

此二書は神社叢書に入る、總社誌は武蔵總社伝記を元として編せしもの

（1行空白）

文庫印

（6行空白）」97

四時辞去、笑翁竹清君は二時十分の汽車にて先きに帰京

社後より西に出て一丘上に出つこゝを御殿跡といひ元ト國造の館跡と伝ふ前並に西方は断崖にて遥に多磨本流をなかめ、眺望、絶佳

猿渡氏と社前にて別れ和田君と共に帰途に就く、又元ときし道をかへり途中より「雀」左折して国分寺跡に至る今日朝は霽れたれと後曇りて今にも雨落ち来らん風情也、礎石なと見丘上の薬師堂に至る先年古瓦を求めたる堂守の家は堅くとざされて人見えず本堂の東方二十「敷」歩程に瓦をつみかさねセメンにて堅めたる塔様のものあり、これ彼の堂守の廃瓦もて塔を築くといひ居りしものなるへし

下部のつみかさねたる瓦は既に幾枚も引ぬかれあり思ふに幾」98

何もなくして崩壊アト方もなくなるへく考へらる、

國分寺庭中を技け時間なれは寺は訪はす直ちにステーションに向ふ途フミ切りにて石器時代遺構を探りしも遺物なし　六時三十六分國分寺発にのるつかれたれは話もなし

新宿に七時過なり電車にのり塩丁下車和田君＝に別かる、家に帰へれ

は八時前なり食後直ちに入浴、両児共未眼さめたり統一を湯に入る、

九時半就寝、

（1行空白）」99

四月廿八日　火曜日　曇、

暁大雨の音に眼さむ三時半なり又まぶたを合せかたし六時起床

午前十時山中翁来話昨日翁帰後の見聞談を為す、貫井青貨堂より上林三官に就ての問合来る何か調ふる書なき欤との事なり

幸に座右の歴代職官表をひもとく、漢代に弁官、鍾官、馬駝あり共に鋳銭官なり直に分明、書物といふものは難有きもの也、

午後仮睡、気分やゝ快復、
調布日記玉川砂利、等散見昨日の散策を忍ひて興深し、
四月廿九日　水曜日
（1行空白）
夜集古会例会通知百五十枚を書し終る時会誌第二校正来る
夜十二時迄かゝりて校了とす」100
四月卅日　木曜日　晴　集古会通知投函
午前十時統一を伴ひ兼ての約束なる博覧会に行く（姉の菓子等トラホーム全治せさるに付のこす）
途中文行堂に立より池の端の骨董舗東堂にて書棚一個を買ふ
これは一昨年の暮れ芝の村上忠太郎方にて買入れしものゝ離れと覚しく高四尺程長五尺黒塗にて下部戸棚、中段に一ヶ処、上段に一個扉あり其扉には詩歌を銀まき絵にして金にて訓点を施しあり徳色庵の号一々記しあり此徳色庵といへるは土炊利勝の嗣子　にして寛永より万治寛文を経貞享に至りて没せられし方なり、金具の紋なる、ヲモダカ並に水車によりて手かゝりを得て判明せしなり
昨年なりしか村上主人に会ひし折の話に貴下書棚を賣りし後程もなく店前を寸分違はぬ品を曳き行くものありいふかしく思ひて行先を尋ねしに神保辺の骨董舗にて市にて買取り今引」101
き取るなりとの答にてあまり不思議の事故御入用ならは尚其行先をつき留めんとの事なりしか其ままになり居りしか頃日貫井銀次郎氏より山中翁への書信のはしに林君方にあると同様なる書棚池ノ端の道具屋にある由記しありしを以て今来り見るに少しも違はぬものなり今の家甚手狭にて置く場処にも少々困れと離し置くも残念なれは値をつけて買取りぬ
去て池ノ端に出れは池上に架設せしケーブルカー電車形の飛行船のことく動きつゝあり小供よろこぶ第一会場に入り直ちに宝亭洋食店に入りて昼食、パンと終りのアイスクリーム気に入る、館内は見ず西門を出て動物園を覩る象骨立気ノ毒にて殆と見るに堪えず
小供の気に入りしは猿、熊、金魚等なり、東照宮前より抱きて三橋に至り電車、車内に入ると直ちに子供つかれて眠り、四谷」102
塩町下車迄しらず四時帰宅
今日は晴れたれと暑からす小供つれの見物には好き日なりき
（2行空白）
五月一日　金曜日　晴　強風
午後三菱銀行より神田に廻はり公木社に立より五時帰宅
留守中伊地知かん子来訪要事ありて予の帰へりを待ち居りしか四時過空しく帰宅之由
夜今日買ひし景教碑文研究読了、景教と大日教と空海との開係を知り始めて近年ゴルドン夫人の高野山に景教流行中国碑の模形を建てたる因縁を知る
（1行空白）」103
二日土曜日　晴　又強風
午前池ノ端骨董舗より書棚持来庭より「はしご」にて二階に上ぐ、掃除午後に及ぶ
風邪の心地にて咽喉痛む、午後臥褥、
夕食後入浴発汗　夕風止みて雨となる、
「雨」五月三日　日曜日　曇、冷
気分わるし終日臥床
夜山中笑翁来話、
五月四日　月曜日
咳嗽あり終日ゴロ／／
夜、「少しく」本の入れかへをする、
五月五日　火曜日　晴　強風　冷」104
五月の節句なり誰か来るかと思ひしに誰れも来らず
平臥、故岡田村雄君執筆の猿楽聞書通覧懐旧の
情を催す　夕、赤飯、さしみ吸物にて此日を祝ふ栄子、統一（満三年三月）よろこぶ
夜、諸新聞社へ集古会の通知を発す、統一曰今日は統一さんのヲツクへ（御節句のナマリ）

五月六日　水曜日　晴　薄暑
漸く夏らしき時候なり　風邪全快
終日土蔵本箱の入れかへ
夕食後入浴、夜くもる
五月七日　木曜日　曇後晴　薄暑
午後　錦町瓦斯会社に至り株込記入を了し文行堂を訪ふ
三日の夜汽車にて京都の入札に赴き昨日帰京と京坂の
軟派の書籍の高價なるには驚きたり難波鉦六冊（ナキワドラ）半紙本」105
七十円といふ［其他］長頭丸法華経一巻八円　五山板も四五種落札（稲
田氏の依頼）せりといふ、
安永の饅頭合、同、餅の林二冊借用五時帰宅
夜、集古会出品整理、
五月八日　金曜日　晴　薄暑
午前十時北京ノ勝山岳陽子来話土産に北京産ノ円座五枚
を貰ふ
十一時兜町来崎商店内の和田氏を訪ひ新瓦斯株賣払らはん
とす同氏不在午後亦行く不在なれとことづてありて店員取扱ふ
帰途丸善に魯庵氏を訪ふ今日出社せず三菱銀行に立寄り、赤坂
伝馬町伊地知氏を訪ひ夕刻、四谷坂町ノ勝山氏の仮寓を訪ひ元
銅印百数十個一括並に銅斧四個古龍幣二個を求む同時トンコウ」106
発掘の経巻を預りかへる、
夕食後銅印なとより分く、
五月九日　土曜日　晴
本日集古会　十時半青柳に行く
　課題　沿革を示すもの　輪並鉤類、印類
午前より三村君、山中君、福田君並に橋田君手伝はる、
来会者四五十名、予は元押百個並に諸名家印十数個を
出す　集古会誌壬子五、癸丑一、二、共三冊本日出来会場にて分配、
夕五時散会、六時帰宅　夜会誌包封

五月十日　日曜日、
（2行空白）」107
（3行空白）
五月十一日　月曜日　曇夕より雨夜に至りて豪雨
（1行空白）
午後［匆々］内田魯庵君来話歓談夜十時過辞去、
　魯庵君談目下問題のシーメンス事件に関し先年向軍治氏シーメ
　ンス社に入りて彼の吉田収吉の役廻りを為したるか彼の如き性行
　いかでコンミッションの媒介なと出来得んや直ちに辞職せし
　か今にして思ひ当るか当時同氏は頻りに外人を罵りて人格も又
　道徳もわきまへざる我利々々なりと憤慨なし居りしか其後
　吉田収吉同氏の後釜に据りて終に悲惨なる最後を遂け」108
　たるなり然るにシ社の［支配人］ヘルマンの通訳を裁判所にて為し居るは妙な
　因縁なりと可笑しく感す云々
同君に上海出版の書目四種貸与　ケンフエル日本紀行を訳すこと、なり
　たりとの談あり
（2行空白）
五月十二日　火曜日　晴　薄暑
午前十時文行堂に赴き京都土産の書籍を見る大して珍本もなし
先日借置きし餅の林、饅頭合二冊買取る、内山椿軒歌集連珠
集二冊、落葉集二冊入手　京都よりの古本中に川喜田君の
先代の豊宮崎文庫に納めし自家の刊本涌蓮短冊帖一帖あり
箱書に
　奉納豊宮崎文庫」109
　短冊帖　涌蓮大徳歌　一帖
　　嘉永六年癸丑八月　津川喜田久太夫政明　頼介足代権太夫弘訓
とあり所謂書を名山石室に蔵すといふこともアテにならぬことなり
同時三村君も来る同処にて昼食同君ハ店へ予は博物館に赴き
玉屋本日本書記［十巻合三冊］一見最初の一ページ並ニ毎巻之奥書を書写す、

応永の古写本なり此書は新吉原の玉屋にありて、世に玉屋本書記の名
高し維新前姫路の国学者　　主唱となりて同志七名と共に
同楼に豪遊して名馴となり其敵娼を通して楼主にからんことを求
む娼婦亦奇物にして周旋甚つとめ遂に日を期して借り出すことを
得姫路藩邸に於て同志と解冊分担して書写し了す維新後
政府の命にて借り上げ其後不明となる然るに十数年前に至り」110
同志の一人小杉椙邨博士府の尋常師範にあるを発見遂に博物
館歴史部の蔵となりたるものなり
又、同館蔵涸池遺藻廿五冊大本を見る屋代弘賢の反古を
堀侯（花の屋）得て黒川春村に命し分類整理せしめしもの
にして

涸池遺藻　　大本廿五冊

宝貨の部三冊、印章の部一冊、鏡の部四冊、
武器曲玉一冊、銅器一冊、石土部一冊、硯四冊、陶器一冊
瓦？四冊、佛器一冊、神佛附人物一冊、墨蹟一、
題跋一冊、雑一冊

序

何かしの岡邊をすくとてむかし見なれし構のうちをよ
そなからさしのそきたりしに庭もまかきも野らとな」111
りておひしけれりてはやしは枯うせいやひろかりし池は水あ
せ唯その庭におひひろこりてしとろもとろに臥みたれ［に］たる
藻屑のみなん其なこりなりけるされとさすかにそのかみを
おもへはなつかしうみすくしかたくてやをら岸邊にお
りたちて見るにあにはからむやその枯ふしたる中にもえもい
ひしらぬ玉藻とも残りてやう／／さま／／にいとめつらかなる
あり又いさごの中をかいさくりあるはこむこん瑠璃のことき
ましれりあなあやしとまておほゆるまゝにこと／／く拾ひもて
来て殿のみまへにさゝけつるにくりかへし「聿」愛けうせさせ給ひ
てやかて十くさあまり四種にえりわけ涸池遺藻としも名つ
けさせ給ひぬかくいふは慶應二年さつきのつこもりはか
りになむ　　黒川　春村

右の中、宝貨の部に　乾隆通宝銭の拓本ありて上に
　文化十九十　蝦夷会所御拂　と弘賢の書にて書きつけあり
アイヌか韃靼と交易しそれを会所にて取りたるものならん」112
又佛像の小磚の図ありて　橘寺地を堀て獲る所文、政、「の」（重書「九」）年、のこと
なりとあり橘寺より出る小磚は近年のこと、思ひしに古く出て居る
也、四時半辞去　古谷清君と体育館に入り薩摩の棒踊りを
見る演技中一人受け損して足を打たれて倒る演者元十数人あり
しか種々故障ありて今は僅に六人に減せり故障といふは多く演技
中の怪我なりといふ、これを見て直ちに帰途に就き六時帰宅
（2行完白）
五月十三日　水曜日　晴
午前十時より会誌の名宛を書し終て市内特別便百世通を四谷
郵便局に出し帰途油カスを求め五時帰宅直ちに菊其他の花物
にやる、
夜幸田成友君を笄町に訪ふ途電車中より青山ノ博覧会第三」113
会場を見る軍艦三笠［型］のイルミネーション見々たれと人出殆となく
気之毒の程なり幸田君近所に「‖」一小屋を借り其家に勉強同
所にて談話後本宅に帰へり写本三貨図彙を見る予も昨春以来
博物館蔵本の同書を写［さ］し［め］て頃日写了せしか欠本なり今幸田君と
引き合はするに二冊欠本なり即ち物價ノ部ノ十、附録の二、の二冊なり
其他博物館本よりは数冊多し［博本は］附録五にて終れり、

附録巻六　銭幣略記　青木敦書作
同　巻七　宝貨事略　白石先生作
同　巻「小」七　八物語配置の事　小瀬甫庵作
同　巻八　天寿随筆
同　巻九　庶有編　白川公作

其他遺考四冊ありこれは物價の部につゝくものなり、

即ち本文廿冊物價の部十冊附録九冊遺考四冊目録一冊共
四十四冊なり　序文によれは三十五巻とあり即目録共」114
三十六巻か普通本なり後ちに増補せしものなり幸田君本は
昨年大阪の著者後裔草間氏より借用して写了せしものなり
又頃日入手せしといふ拓本二片を見る

凡五寸
右書神亀六年二月九日

長凡一尺
右京三條二坊従四位下小治田朝臣安
萬侶大倭国山邊郡都家郷郡里嗣安墓
神亀六年歳次己巳二月九日

凡五寸
左琴神亀六年二月九日

これ安麿の墓碑とて昨年発掘京都大学にて入手せしを大阪朝日
に木崎好尚氏紙上に報せしより博物館厄鬼となりて県廳に
かけあひ発掘者は警察に呼ひ出され結局大学より取戻し」115
県廳に差出すへき旨受書を出して引取りしか其後京都大学
よりは中々其返戻に応せす中に立ちし県廳も発掘人も大迷惑を
為し未た未解決にて荏然経過しつゝあるものなり、
又これも頃日発掘せし小野毛人の拓本を見るこれは屡々発掘
され其都度埋蔵せられしものなるか今回は今後の盗難を恐れて
京都大学にて目下保管中にかゝるものといふ

凡長二尺幅二寸
ウラ　飛鳥浄御原宮治天下天皇御朝
任太政官兼刑部大卿位大錦上
（1行空白）

表
小野毛人朝臣之墓　営造歳次丁丑年十二月上旬即葬」116

又光悦本伊勢物語肖聞抄三冊の中上巻。
つゝゐつゝ井つゝにかけしまろかたけの條
ノウラ六行目。
こゝ（上下転倒）契をかはすへしなといへるなる
（此の字倒になり居れりこれにて光悦本の活字たることは
現然たりゝ近年さる知人に此書を「〓」偶然開き「尤」て示せ
しに其人此字の倒刷せしを発見せしなりき
談しに夢中になり辞して出つれは十一時を過きたり十二時前帰
宅　三貨図彙物價の十、附録ノ二借用
五月十四日　木曜日　雨
会誌百卅通地方発送
土蔵本箱の入れかへ　魯庵君より来書、近著沈黙の饒舌一冊
夜に三貨図彙うつす　恵贈」117
五月十五日　金曜日　雨
土蔵片付け　夜入浴
夜山中笑翁来話柳田君より貰ひしとて肥後比奈久の雉子車並
角力取玩具を贈らる、
同翁談頃日故小中村博士の官職略志を一読幕府の官制等に就
ては誤り少なからす例へは御小人目附、御徒士等の御の字を省きし
等なり諸侯方に於ては此敬称を称せさるも幕府の役としては御
の字を省きては通用せさるもの也云々
これにて思ふに今の徒町、壱岐坂のことき何故に御の字を省きしも
のか解しかたし徒町と書しても誰れもカチマチと読むものはなし、
但壱岐坂ハ、イキヂカといひ電車の車掌も呼ふ様になれり
同翁曰四谷の箪笥町ハ箪笥「町」商の多く住ひせしよりの名牛込の
御箪笥町は幕府の御箪笥組即ち弾薬を運ふかゝりなり今の輜重のごとし
の邸宅ありし所故御の敬称を附せり今は敬称を省きて此」118
相違を知るものなし、駕籠町も元トは御駕籠町なり、
細工町もお細工町なり其他猶あるへし云々

五月十六日　土曜日　雨
土蔵片付
夜　うつしもの、
五月十七日　日曜日　雨
又雨毎日鬱陶し、
土蔵片付　今日にて漸く本箱入れかへ済む、
夜　数日分の日記を認む、本日丸善よりカストムスオブゼワールド
二冊届く
五月十八日　月曜日　快晴
久しふりにて霽れたり、
午前八時菊粋商会有山新兵ヱといふ人来る美屋備会といへる」119
月二回の入札会を起すに就て賛成せよとなり、
今日も土蔵の片つけものにて夕に至る、
　鉢花ひらく二鉢座敷に上く
夕、朝顔の種子蒔く
夜集古会出品目録等整理、
五月十九月　火曜日
今日も亦片附ものにてくらす、先月買入れし［徳色庵銘］書棚を書斎に
うつす、
五月廿日　水曜日　雨
昨夜より亦雨　朝に至りて止む烈風夕より亦ふり出づ
暴風雨の徴あり、
今日も又片つけもの。漸く本箱を土蔵に納め「北[了]」ふ」120
五月廿一日　木曜日　霽
昨夜豪雨今朝止み昼頃より霽る、
今日も又書斎の片つけもの
夕伊地知かん子来訪夕食を共にすおてい子供両人をつれ途
中迄見送る、
夜明後廿三日夜歓無極会通知を幸田、内田、三村、山中、木内、
橋田、和田君等に出す
五月廿二日　金曜日　晴　冷
朝夕冷気羽織を着す
今日も又書斎整理夕刻一ト先切り上ぐ
長屋久しく空き居りしが今日、ふさがる諸橋義、
夜山中笑翁来話明日の出品を預け帰へらる、」121
五月廿三日　土曜日
午前三菱より榛原にて買物公木社に立寄り三番町にて斬髪
一時過帰宅
夜歓無極会第七回、山中、内田、木内愚、幸田、貫井之五君
三村君は朝早しとて不参和田君も御大葬前多忙にて欠席
魯庵君、南米土人土器、ハワイ土人ノ首飾、埃及ノカンテラ、埃及副
葬品模造、山中笑翁、天守教徒所持古銅牌、指輪等、釣舩清
次ノ書一幅、新田ノ猫、幸田君、安磨墓碑銘、小野毛人銅碑
銘拓本　　貫井青貨堂君　傳形半両並五銖等
予、維新前越谷製菖蒲太刀、宝暦の紙幟、
（2行空白）」122
（9行空白）
五月廿四日　日曜日　曇　夕雨夜に至りて止む
今日照憲皇太后陛下之御大葬にて廿四、五、六廃朝被仰出、
終日閉居昨夜出品物をうつす」123
午後八時青山御所御発引之号砲とゝろき続きて分時砲百一発
鳴りひゝく、
午後十一時半又号砲今や代々木葬場殿に於て御祭典の終れるを
報するなり
此日官衙学校諸商賈皆休業、
「五月廿五日　月曜日　晴　薄暑」
午後山中笑翁来話注意之件あり厚意謝すへし
（2行空白）

五月廿五日　月曜日
午後新海竹太郎氏初めて来訪魯庵君同行なり浮世
絵下書キ等を展観して夕に至る夕食後両君辞去
「~~五月廿~~」夜蔵書印譜校正」124
（2行空白）
五月廿六日　火曜日
（3行空白）
五月廿七日　水曜日
午後栄子トラホーム手術
（2行空白）
五月廿八日　木曜日
午後うつしもの　夜山中翁来話」125
うつしもの並校正にて子夜を過きて就褥
五月廿九日　金曜日　曇　夜に入りて雨　冷
昨夜遅かりし為め眠（重書「ね」）むし假睡僅に快復
午後蔵書印譜ノコリ校正、夜うつしもの
夜、公木社、印刷代集古会誌三冊分、赤松君、遠州よりの米代、婦人之友
社へ伸子代振替にて払出し
本日松本和、沢崎大佐等判決あり松本中将（ママ）徴役三年に処せ
らる実に気之毒之至りに堪えず嗚呼
五月廿日　土曜日　陰雨
終日閉居
六月発行ノ独立評論を読む中に愛山氏の三井一家の論
評ありて末段、憐むへき松本中将よ彼は三井の犠牲と」126
なり了れりの一句あり流石に通儒之言「‖」なり世人は徒らに
其末をのみ攻めて其本を極めず已ぬるかな
夜浅野梅堂の「親朋字号」写了夜十二時に至る
五月廿一日　日曜日　霽　薄暑
国民新聞松本氏一昨夕収監［小菅］以来の動静を報す［姻戚之関係ある余は］気之毒
にして卒読に堪えず、考ふへきは三年後に於ける同氏の
復活方法なり
午後集古会々費（地方）徴収書整理、取立郵便
夜蔵書印譜校正十時過に至る」127頁9行目

＊　＊　＊

なお、本翻字紹介は、平成24年度科学研究費の挑戦的萌芽研究（課題番号：24652049）による研究報告である。